

とまどいながら…… 土井 隆

私は慨して、余りとまどうことを知らない人間だと思つてゐる。それは己れを持つるに、そう困難を感じたことがない、いわば生意気な部類に属する男だからかも知れない。

しかし、或る時、私は、そのとまどいというものを、強烈に覚えた。

この三月のことである。――

女ばかりの大学、その名は立正女子短大。――さて、貴方に依頼するのは、貴方の世界のこと、マスコミ。それとテレビ制作。その講義である――と、告げられた時である。

成る程、マスコミにしても、テレビ制作にしても、私の最も近い世界。いや、私が住む所でさえあるのだから、その場所について語れといわれれば、いとも易しいと、応えらるるも

のである。ラジオ制作者からテレビ・ディレクター。今では、テレビ・プロデューサーであり、レコードの作詩家でもある。その過程で得た諸々の経験は、依頼者の言葉通り、マスコミ研究と、テレビ制作論に通じるかも知れない。

だが、直ちにそれが、一般的概念の講義――而も、女大学の講師という論理にまでつながるかどうか。……私はそれにとまどいながらも、いつか、その依頼をうけるはめになったとき、或る試みをする積りで教壇に立つて見ようと思つた。それは、こうである。

仮に私が、教師の名の下に、私の為すべきこと、私の与え得べきことがあるなら、それは最早、私を選び依頼した、その事にある筈なのだから、私はただそれに応えればよいといふこと。

つまり今や、私のいわば体臭にまでなっている、マスコミ

とテレビ、というものを、機会あるごとに、私自身の眼や、口や、その他、私の一挙一動で語ることに、そして、それが学生のも、而も女性の将来の生活感情に、より効果的な反映があるならば、私の講師という在り方も、正當づけられるであろうということ。……………

私は、そう思うことで、当初のとまどいから、一応救われた。

そして、既に半歳余り、私は、私なりの情熱をもって、よく弁舌つたものだ、今思い出している。だが、前期における、マスコミ研究で語ったことといえ、結局、マスコミの始源を、人と人とのコミュニケーションに起して、大衆社会に移行し、やっと本題の、この最も現代的な所産である、マスコミ機関に一瞥をくれた所で終ってしまった。

しかし、私の持論は真いたつもりである。

人間はヒューマンな姿（つまり幸福）を、この社会に求めるとき、己れ個人の在り方が、他に對して、先ずヒューマンであるべきこと。そして、己れを知る機会があるならば、今日マスコミは、その鏡にもなり得るだろうと、いうこと。これである。――

では、ひるがえって、それを受けとった学生側はどうだったろう。ともあれ、教壇に立って、私が見たものは、恐らく

私が、マスコミ論だ、テレビ制作論だと、例えば、スタジオで私の後継者（テレビ・ディレクターを志す者）に話す仕方つまり、専門的な職能のためのみ、若し語ったとしたら、私の当初のとまどい以上に、とまどったであろう顔ばかりだった。

そこで私は、（本学の希望することも、当然そうであつてと思うが）前にもいった通り、私というマスコミ媒体の一つ、テレビの現場の人間である、生の素材が、こう人間を、或いは、こう社会を考えていると、述べることによつて、いつか学生達に、マスコミの受け手として、それが幾分でも有意義な材料になればよいと、いうことで終始した。

これが、私のせい一杯の講師としての職責であらうし、又教師を職業としていない私の立場であるとも、思ったのである。

一方、后期に属しているテレビ制作論となれば、前述のことは、一層顕著になる。

だから、学生達に、私はテレビ制作論という、どちらかといえば、その当事者の側で検討さるべき標電で、今后、物を語るとは思っていない。その特殊な機能のことを、スタジオの外で、どんなに語っても制作論にはならないのである。

しかし、だからといって、その専門大学ではない、而も女子短大の一講座に加えられる、それ相応の理由があるように

マスコミ——テレビは、今日、我々の社会生活にとって、決して小さな存在ではあり得ないし、新聞を読み、ラジオを聞き、テレビを観る日常は、今后、益々我々の生活意識を政治的にも、社会的にも、おしひろげてゆくことは確かなのだから……。

そこで、送り手に対する受け手という、マスコミと自分の関係を、この日常に見出し、認識するとき、私は学生達に願うのである。この際、マスコミに対して、消極的であるよりも、積極的であれと……

そして、とまどいながら教壇に立った、マスコミの送り手である私に、むしろ挑戦する構えをとってほしいと、いうことである。

でない、最後まで、私は、とまどいながら教壇に立っていないから。

文芸科・学年歴 (昭和三十九年度)

- 四月十日 入学式
- 四月十一日 前期授業開始
- 四月二十五日 合同観劇会(青江教授創作劇)
- 五月五日 八王子万葉文学散歩
- 五月八日 ミロのヴァイナス展見学
- 六月十三日 鎌倉文学散歩
- 六月二十六日 朝日新聞社見学
- 七月六日 授業終了(夏期休暇—九月八日まで)
- 七月九日 修学旅行(北海道—七月十八日まで)
- 八月三十一日 宮沢賢治研修旅行(九月五日まで)
- 九月九日 授業開始
- 九月二十三日 前期定期試験(十月二日まで)
- 十月三、四、五日 定期試験休暇
- 十月七日 後期授業開始
- 十月八日 文芸講演と映画の会(シエークスピア祭)
- 十月十七日 十八日 創立記念祭
- 十月十七日 日本古美術展見学
- 十月三十四日 文芸講演会(於立正大学)
- 十月三十日、十一月一日 蓉光祭(大学祭)
- 十一月七日 文芸講演会(於立正大学)
- 十二月十四日 授業終了(冬期休暇)
- 一月十一日 授業開始
- 二月二十二日 後期授業終了
- 二月二十四日 後期定期試験
- 二月二十九日 各ゼミ論文提出締切
- 三月二十五日 卒業式